

第2章 子どもが主人公！日本各地のあまんじゃく昔話③

～広島・山口に伝わる“息子不孝”～

むすこふこう



【あらすじ】

◆広島県佐伯郡旧大柿町（現江田島市）に伝わる息子不孝

“昔或る所に一人の息子があって、親の言う事は皆反対ばかりしていた。右と言えば左、左と言えば右と言う様な有様である。村人はアマンジャクとあだ名をつけていた。父が死んでも死体は山へ埋めるのだと言えば、海へすてるといい、海へすてると言えば、山へ埋めると言う。そのうちに母が病気になって、私が死んだら遠い海の中へ墓を建ててくれと言うた。母の心中は遠海と言えば近い所で陸に墓を立ててくれるだろうと思って、反対を言いました。母の死後息子のアマンジャクは、今迄わしはいつも母の反対ばかりしたが、母の言った最後の遺言だけは守ろうと思って海の中に墓を立てたのだそうです。其の墓は今でも廿日市と五日市の間の島にある。”（昔話の研究.p192.芸備.p193）

◆広島県山県郡大朝町岩戸に伝わる息子不孝

“親の反対ばかりする子供がいる。親が「自分が死んだら、こもへ包んで川へ投げてくれよ」と頼むと、子供は「今まで親の反対ばかりしてきたから、今度だけは親の頼むとおりにしてやろう」と言って、親をこもへ包んで川へ投げた。親の方はそう言えば自分をきれいな棺に入れて葬式をしてくれるだろうと思ったのだが、子の方は今までいつも反対したから今度だけはと親の言葉に従ったのである。”（大朝 p261）

◆山口県大島郡に伝わる息子不孝

“親不孝者があって親の言うことを聞かない。親が年老いて病気になり、「この世の思い出に宮島に参りたい」と頼むと、息子も船を出してくれる。宮島の近くになって、親は、宮島のほうへ行ってもらおうと、反対の可部の島を指して「あの島へ行け」と言う。息子は今度は親の言いつけにそむくまいと可部の島に船をつける。親も宮島に参れず、そこで死んだ。”（周防大島 p178）

（上記3つの話はいずれも『広島・山口 日本昔話通観第20巻』稲田浩二、小沢俊夫.(1979年).同朋舎.より引用)

【解説・コメント】

- これらの話も広島市佐伯区の「あまんじゃく伝説」に似ている昔話です。
 - ①親に逆らってばかりの子どもが主人公
 - ②親は子どもの天邪鬼な性格を読んで、葬ってほしい場所とは反対の場所を伝える。
 - ③子どもは親の最期を目の当たりにして改心したため、結局、親の希望は叶わなかった。この3点が佐伯区の「あまんじゃく伝説」と類似していることは、動物昔話の「雨蛙不孝」、「鳶不孝」と同じです。
- 注目すべきは、具体的な地名が登場することです。最初の広島県佐伯郡旧大柿町に伝わる「息子不孝」には“その墓は今でも廿日市と五日市の間の島にある”と、津久根島を思わせる一文が記されています。しかも、“村人はアマンジャクとあだ名をつけていた”と、「あまんじゃく伝説」にも出てくる件^{くだり}もあります。
その一方で、広島県佐伯郡旧大柿町の「息子不孝」では「母親の墓を島に建てた」とあり、佐伯区の「あまんじゃく伝説」の「父親の墓を島に建てた」というところと相違します。
- また、山口県大島郡に伝わる「息子不孝」には、“宮島の近くになって、親は、宮島のほうへ行ってもらおうと、反対の可部の島を指して「あの島へ行け」と言う”と、“宮島”、“可部の島”という具体的な島名が登場します。この“可部の島”は宮島南西部にある「可部島」(下図)を指していると考えられ、地域に根ざした昔話といえます。



提供：廿日市市